ゲストスピーチ報告書

旧軍人会館の歴史的価値と九段会館の保存改修について

講師：　東京工業大学名誉教授　藤岡洋保

2023年1月23日

主催

公益社団法人　日本建築家協会

関東甲信越支部　保存問題委員会　(委員長　太田安則)

報告書まとめ：福田之一

（添付参考資料）

２０１４要望書、２０２２見学会記録、その他

公益社団法人
日本建築家協会
関東甲信越支部
保存問題委員会
ゲストスピーチ

旧軍人会館の歴史的価値と九段会館の保存改修について

2023.
1.28 [土]
15:00-17:00

会場　/ JIA館 建築家クラブ
（Zoomウェビナー併用）
参加対象 / JIA会員
入場無料 / 下記にて事前登録制

九段会館テラスとして再生された九段会館（旧軍人会館）。創建時のコンペの経緯や、提出された各案の比較から読み取れる設計者の創意工夫、建物内外に施された細部意匠を紐解くことで、「帝冠様式」とひとくくりにされがちな本建物の歴史的価値を改めて見つめ直し、その魅力を探ります。

講師：藤岡洋保 東京工業大学名誉教授

東京工業大学工学部助教授・教授(建築学科)等を経て、2015年より名誉教授。日本近代における「日本的なもの」の系譜や日本の近代主義建築の特徴、建築思想、建築技術、保存論を研究テーマとし、歴史的建造物の保存にも携わる。
文化庁第二専門調査会会長等を歴任。
2011年 日本建築学会賞（論文）2013年「建築と社会」賞受賞。
著書に「表現者・堀口捨巳ー総合芸術の探求ー」、「明治神宮の建築ー日本近代を象徴する空間」等

申込方法：会場参加：　タイトルに「1月28日ゲストスピーチ申込」と明記し、本文に御氏名と連絡先をお書き添えの上、下記問合せ先までメールにてお申し込みください（先着30名）
Zoom参加：左のQRコードまたは JIA関東甲信越支部ウェブサイトのイベントページよりお申し込みください。当日のリンク先とパスコードをメールにてお送りします
主催　：JIA関東甲信越支部保存問題委員会
問合せ先：JIA関東甲信越支部事務局　TEL：03-3408-8291　E-mail：info-kanto@jia.or.jp

イベント名称	**「旧軍人会館の歴史的価値と九段会館の保存改修について」**
開催日時	2023年1月28日（土）　15:00～17:00
講師	藤岡洋保　／東京工業大学名誉教授、日本建築学会正会員
内容	ＪＩＡ関東甲信越支部保存問題員会講演会 「旧軍人会館の歴史的価値と九段会館の保存改修について」 【講師】藤岡洋保 東京工業大学工学部助教授・教授(建築学科) 等を経て、2015年より名誉教授。 日本近代における「日本的なもの」の系譜や日本の近代主義建築の特徴、建築思想、建築技術、保存論を研究テーマとし、歴史的建造物の保存にも携わる。 文化庁第二専門調査会会長などを歴任。 2011年日本建築学会賞(論文)。2013年「建築と社会」賞受賞。 著書に「表現者・堀口捨巳ー総合芸術の探求ー」、「明治神宮の建築ー日本近代を象徴する空間」等
参加対象	ＪＩＡ会員
参加費	無料
申し込み方法	下記リンク先からウェビナー登録をお願いします。 https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_BVgnIwObReuEHmdcSuADzg
会場	建築家クラブ（東京都渋谷区神宮前2-3-18　JIA館）および 公式ZOOMウェビナー
主催・共催等	JIA関東甲信越支部保存問題委員会
CPD単位	2単位
お問い合わせ先	JIA関東甲信越支部事務局　大西 TEL 03-3408-8291　e-mail mohnishi@jia.or.jp

藤　岡　洋　保　先生　　令和4年11月吉日

日本建築家協会関東甲信越支部保存問題委員会　委員長　太田安則

旧軍人会館（現・九段会館テラス）の保存活用に関する
シンポジウムにおけるご講演のお願い

謹啓

秋晴の候、藤岡先生におかれましてはいよいよご活躍のこととお喜び申し上げます。
また、平素より日本建築家協会の活動にご理解、ご協力を賜り誠にありがとうございます。

さて先日、事業者様のご厚意により、関東甲信越支部保存問題委員会の委員を中心に、九段会館テラスの見学会を開催致しました。旧九段会館の建築的特徴を尊重した保存の在り方、残せるものは残しつつ、修復が必要なものについては当初の姿をできる限り忠実に再現された細部に、委員一同、大変多くの事を学ばせていただきました。

その際、既存建物の歴史価値の評価や保存のあり方の検討については、藤岡先生のご指導に拠るところが大きいと伺いました。また、「コア東京」にご発表の「建築史の世界　第10回　軍人会館（現・九段会館テラス）ー「帝冠様式」は軍国主義の象徴か？　」を拝読し、一般的には「帝冠様式」とひとくくりにされがちな本建物について、その細部を紐解きながら、旧軍人会館がいかに当時の時代背景や設計者の思いを反映した建物であるかを知り、設計者で構成された本会の会員として、大変感銘を受けた次第でございます。

つきましては、当委員会が企画する下記シンポジウムにおいて、旧軍人会館（現・九段会館テラス）の建設経緯や設計者の配慮、また再開発にあたっての歴史的価値の継承の考え方や旧ホール部分の資料保存等につきましてご講演を賜りたく、お願い申し上げる次第です。

ご多忙中恐れ入りますが、何卒ご承諾いただきたくご配意を賜りますようお願い申し上げます。
なお、日時などにつきましては藤岡先生のご都合をお伺いした上で決定したいと存じます。 近日中に改めてお電話させていただきますが、まずは書中にてお願い申し上げます。

謹言

東工大名誉教授　藤岡先生からの返信コメント

本日、東工大総務課からメールで貴委員会から私宛ての依頼状を受け取りました。そのご依頼に前向きに検討させていただくことを回答します。

ただ、九段会館保存に際しての建築史的価値の報告書作成は、国交省の外郭団体の建築保全センターを介して財務省からいただいた仕事なので、その内容を貴委員会の方々にお話ししていいかどうかを保全センターの担当者に問い合わせ、許可をいただけたら、ご要望にお応えしたいと考えております。

なお、私は報告書の作成を担当したのですが、九段会館の改修計画には関わっておりません。その改修のコンセプトや設計・施工は、保存改修の委員会の決定事項をもとに、東急不動産と鹿島建設が担当しました。

その内容は『日経アーキテクチャー』2022年11月10日号に掲載されている通りで、改修の際の問題点やその対処法などについては、その担当だった鹿島建設設計本部建築設計統括グループ・チーフアーキテクトの山本幸彦さんが適任ではないかとも思います。

私はといえば、保全センターからその保存改修の評価をすることを頼まれて、今年6月、7月にほぼ竣工した建物を視察し、7月末にその報告書を提出したので、改修のポイントはかなり把握しておりますが、より具体的な話をということであれば、山本さんにもお声がけいただいたほうがいいように思われます。

旧軍人会館の建築史的価値と九段会館の保存改修について

東京工業大学名誉教授・工学博士
近代建築史　藤岡 洋保

1．はじめに

「九段会館テラス」として昨年１０ 月にオープンした施設の既存部は１９３０(昭和５)年に行われたコンペの１等案をもとに、１９３４(昭和９)年に建設された「軍人会館」である。その建設経緯や建築史的価値を解説しつつ、戦後に「九段会館」になってからの改修、そして２０２２(令和４)年にその一部を保存し、その後ろに１７ 階建てのオフィスビルを増設した「九段会館テラス」のコンセプトと保存改修工事の注目点を紹介する。

軍人会館は、財団法人帝国在郷軍人会により、昭和天皇御大典記念事業の一環としての寄付金を元に計画され、競技設計(コンペ)の１ 等当選案をもとに、伊東忠太の監修、川元良一の実施設計、清水組(現・清水建設)の施工で１９３４(昭和９)年３ 月に竣工したもので、写真東京都千代田区九段南１ 丁目６ 番５ 号(建設時：東京市麹町区九段１ 丁目５ 番地)に建つ、鉄骨鉄筋コンクリート造地上４ 階地下１ 階建て、延床面積４,３７０ 坪５２３(竣工時、１４,４２２.７２㎡)の建物である。

この建物は、大正末期から昭和初期にあいついで実施された、記念建造物の外観意匠を求めた大規模コンペの一例として近代建築史上よく知られるもので、そのデザインは、俗に「帝冠様式」(この語は当時の建築文献にはまず見られない)と呼ばれる、鉄骨鉄筋コンクリート造の建物に瓦葺きの勾配屋根を一部に冠したものである。

この建物の九段坂下交差点側のＬ 字形の部分を保存改修し、その後ろに１７ 階建てのオフィスビルを新設する再開発事業を経て、２０２２(令和４)年１０ 月にリニューアル・オープンしたのが「九段会館テラス」である。

2．いわゆる「帝冠様式」について

軍人会館は「帝冠様式」の典型例といわれることが多い。それは、鉄骨鉄筋コンクリート造の建物に瓦葺きの勾配屋根を載せた建築のことだが、当時の文献にこの語はまず登場しないので、ここでは、当時の表記に倣って「日本趣味の建築」と呼ぶ。大正末期から昭和戦前は大規模コンペが相ついで行われた「コンペの時代」で、「日本趣味の建築」が当選し、建設されたことが知られている。日本独自の記念性を表現することが期待されていたわけである。当時のモダニストはそれを糾弾したが、モダニストの側にそれに代わり得る案があったわけではない。

3．軍人会館の計画とコンペの実施

「軍人会館」は、その名称のゆえか、「軍国主義の象徴」のように見なされてきたが、東京の軍人会館の３ 年後に陸軍第四師団経理部の設計で建設された「大阪軍人会館」の外観・内装すべてがモダニズムでデザインされていたことを知るだけでも、「軍人会館」＝「軍国主義やファシズムの体現」＝「瓦葺きの勾配屋根を冠する建物」というような単純な図式ではなかったことがわかる。

先述のように、軍人会館のコンペは帝国在郷軍人会により、靖国神社の権殿地に計画されたもので、１９３０(昭和５)年に行われた。ちなみに、「権殿」の「権」は「仮の」という意味で「権殿」は、本殿が罹災したり、修理が必要になった時に御神体を移すための施設のことである。

軍人会館のコンペでは、当時の通例に倣い、「線図」(略平面図)が与えられていた。応募者はそれに従う義務はなかったが、締切までの期間が短かったこともあってか、当時の当選案には線図を踏襲したものが多く、軍人会館コンペもその例外ではなかった。

その線図からわかるのは、この建物がクラブ建築であり、講堂のような大空間から、大食堂や宴会場のような中規模の室、さらには小規模な宿泊室が混在する複合施設として計画されていたことである。そして、講堂や宴会、宿泊などの機能ごとに玄関が別々に設けられていた。また、敷地形状はひとつの隅が内側に屈折した凹五角形で、そこに上記の複合機能を持つ建物を収めるために、線図は非相称になっていた。記念建造物に一般的な、左右相称の構成がやりにくい建物だったのである。それに要項の「設計心得」に示されていた「国粋ノ気品ヲ備ヘ荘厳雄大ノ特色ヲ表現スル」記念建造物らしい外観をまとわせることという条件が加わるので、当時のコンペの中でも難易度の高いものだったといえる。

コンペの１ 等賞金は５,０００ 円で、当時の東京市建築技師の年俸が２,０００ 円弱だったことを知れば、かなりの高額だったことがうかがえる。当時のコンペの賞金は高額で、多くの応募案を集めるのに有効だった。軍人会館コンペには３２３ 案もの応募があった。

このコンペの１等当選者は小野武雄(１８８３-１９６７：工手学校１９０２ 年７ 月卒、コロンビア大学で学ぶ／大蔵省営繕管財局技師)だった。小野案が１ 等に選ばれた理由は、先掲の難条件に対して、「国粋ノ気品ヲ備ヘ荘厳雄大ノ特色ヲ表現スル」立面を提案できたことにあると考えられる。まず、ａ) 建物内の講堂や宴会、事務、宿泊のそれぞれの機能に対応するために、建物の玄関が北西(講堂・宴会用)、北東(事務用)、南東(宿泊用)に１ つずつの計３ つが必要になるが、それらの玄関部の立面の中央を縦に貫くように、ジャイアント・オーダー風の大きな柱型を配して、立面の主な要素にした。それはヴォリュームが突出する部分に配されており、その突出部を強調する役割も担う。この複数層にわたる柱型は、バロック様式のモチーフのひとつであるジャイアント・オーダーの簡略形と見なせる。また、ｂ) ３ 層構成にした立面の中間層に大きめのスクラッチ・タイルを１ 列おきに突出させて張り、立面に水平方向の凹凸をつけて力強さを感じさせる表現にした。それは、ａ) の縦長の柱型の垂直性との強い対比をつくり出し、立面に緊張感を与えている。他の当選案と比べて全体にシンプルでありながら、力強さを感じさせる表現にし得たことが評価できる。ちなみに、東立面を、塔屋を除いてほぼ相称に整えたことも注目される。

4. 軍人会館敷地の由来

九段会館テラスが建つ場所は、江戸時代は武家地(旗本屋敷)だった。幕末には、北側道路に接するあたりから九段会館講堂あたりまでは蕃書調所の敷地だった。その近くに招魂社(1873 年創立、1879 年から靖国神社)が建立され、陸軍がその土地を管理し、その東隣の区画には陸軍の将校クラブ・偕行社が、堀端の細長い敷地には軍人の銅像が並べられた。のちの軍人会館予定地はその国有地の一部で、先掲のように、靖国神社の権殿地だった。

5. 軍人会館の実施設計とその設計趣旨

実施設計は、川元良一(1890-1977 、東京帝大 1914 年卒、設計事務所自営)が担当した。1 等当選者が実施設計に関わらないのは当時のコンペの通例で、当選案の著作権もコンペ主催者(軍人会館の場合は帝国在郷軍人会)に帰属することになっていた。当時の建築家は、それを了解したうえで応募していたわけである。

実施設計にあたって、川元はまず、1 等案のコンセプトや外観をおおむね踏襲しつつ、南東玄関近くのエレベーター・コアの平面を変更して、塔屋の棟の向きまで含めて、立面図上でほぼ相称に見えるようにした。1 等案の意図をより明瞭にしたのである。

また、1等案では塔屋の勾配屋根端部の上に照り(反り)がつけられていたが、実施案では一直線になるように変更された。その勾配屋根に葺かれた瓦は断面が角張った特注のものになっており、鴟尾も、幾何学的な図形のコンポジションとしてデザインされている。なお、1 等案では柱型の上に組物がつき、軒下は繁垂木になっていたが、実施案では 3 連の太めのキャンティレバーを間隔を空けて並べるだけにして、軒下をすっきりさせた。

これらの一連の変更は、モチーフを幾何学的でシンプルな形にするという趣旨で一貫しており、当時流行していたアール・デコの影響を感じさせる。

外壁には、腰壁部分に花崗岩や擬石が、その上の壁面には、1 等案に倣い、大きめのスクラッチ・タイルが交互に凹凸になるように張り付けられている。立面に力強さを感じさせるための処置だろうが、このような凝ったタイル張りは当時の建築でも珍しい。

以上から、実施設計では装飾や細部を幾何学的なモチーフで整えたことがわかる。1等案の外観意匠を、モダンかつシンプルになるように改変したわけである。

外観で装飾が認められるのは、3 つの主玄関まわりと、北立面頂部の鬼面装飾(1 等案にはなかった)、そしてジャイアント・オーダー風の擬石の柱形の頂部である。それらは、幾何学的なモチーフによる構成というコンセプトで一貫している。上記の鬼面装飾が、それを象徴しているともいえる。皇居の鬼門にあたるということで魔除けの意味があるともいわれるものだが、具象的にではなく、幾何学的な平面によるコンポジションという趣旨でデザインされている。ここにもモダンなアレンジが感じられる。

内部意匠にも、外観同様、当時のモダンなやり方が見られる。特に、講堂の玄関ホール、講堂側壁の菱形文様、講堂北側左右の主階段、2 階の貴賓室まわり、3～4 階の 2 層吹き抜けの大食堂のバルコニーや丸窓、天井中心軸に沿う照明両端の帯状の装飾に、アール・デコ的な手法が見られる。

なお、講堂の音響設計は、この分野の日本のパイオニアだった佐藤武夫(当時・早稲田大学助教授)が担当した。佐藤は、最奥部まで講演者の声を届かせるために、この講堂の客席天井面の一番後ろの断面をヴォールト状にしている。また壁面や天井には、音を吸収しつつ適度に反射させるために、コルクを張っていた。

内装でもっとも注目されるのは、2 階北東隅の貴賓室と次の間(副室)である。貴賓室は和洋折衷の意匠でまとめられており、アール・デコ風の暖炉前飾り、寄木張りの床、暗赤色のマット面に斜線のモチーフが配された腰壁タイル、床の透かし彫りなど、凝った内装になっている。また、北の主玄関や 3, 4 階吹抜の大食堂(九段会館時代は宴会場)、北側の 2 つの階段室、そして儀礼室(結婚式場)の内装も注目される。なお、階段室の手摺には大理石が大きなピースで用いられている。

6.「日本趣味の建築」の背景

「軍人会館」が昭和天皇御大典(御大礼)記念事業の一環だったように、「日本趣味の建築」には御大典関連事業の寄付で建てられたものが多い。また「場所性」が「日本趣味」を要請したとみられるものもある。「日本趣味の建築」には、御大典や、城の傍に建つことなどを踏まえた記念建造物という側面もあり、ナショナリズムの表現が求められやすい背景があったわけである。

1930 年代は、欧米でも記念建造物にナショナリズムの表現が求められた時代だった。そこでよく用いられたのは古代ギリシャ・ローマ様式をもとにした新古典主義だったが、日本の場合、それに倣うだけでは日本独自の記念性を示すことにはならないので、瓦葺きの勾配屋根という過去の日本建築、それも特に仏教建築のモチーフが好適と見なされ、それを冠した案が記念建造物のコンペで多数当選し、建設されることになったのである。それは、当時終焉を迎えつつあった歴史主義に属するもので、日本独自の記念性を表すために寺院建築の瓦屋根のモチーフが適用されたということである。ナショナリズムというイデオロギーに支えられたものではあったが、そこに「軍国主義」や「ファシズム」は含まれていない。

7. 軍人会館の建築史的価値

「軍人会館」は、変形敷地に建つ、複合機能を持つ、非相称の平面の建物に威厳や力強さを表現するために、玄関などの主要部にジャイアント・オーダー風の柱型を配し、その間に一列おきに出っ張る大きめのタイルを水平に並べ、垂直性と水平性の対比を強調して荘重さを演出しつつ、軒先を直線にし、幾何学的でモダンなデザインの瓦や鴟尾を配した建物で、

「軍国主義やファシズムの表現」というような類いのものではなく、装飾を幾何学的にアレンジし、内装にアール・デコを多用するなど、当時の新しい美学でまとめられた建物だった。実施設計者の川元にも軍国主義を表現しようという意識は感じられない。この建物の設計者の川元が、コンペ 1 等案を改良して東立面を相称にしつつ、当時の新しい息吹が感じられるように手を加え、荘重さを表現しながら、モダンなデザインでまとめたことが評価される。

8. 九段会館時代の改装と九段会館テラスへの保存改修再開発

太平洋戦争後、軍人会館はGHQ に接収され、”ARMY HALL”として使われた。1953(昭

和28)年の「財団法人日本遺族会に対する国有財産の無償貸付に関する法律」により日本遺族会に無償貸与されることになり、そのときに「九段会館」と改称された。1957(昭和32)年に遺族会が引き継ぐことになるのに先立って、宿泊施設と宴会場に改装するため、講堂や貴賓室、大食堂以外が宿泊室に変更された。その後、団体旅行の需要が減り、結婚式・披露宴、宴会などへの対応が求められるようになったことから、1983(昭和58)年には、1 階東端をひと続きのロビーに変更し、その部分の上階が結婚式場や控室、宿泊室、写真撮影室などに変更された。

2011(平成23)年3 月の東日本大震災でのホールの講堂天井落下による人身事故の後からは建物の使用が停止され、そこから維持資金を得ていた日本遺族会の存続が危ぶまれる事態になった。それを打開すべく、国有財産を所管する財務省が2016(平成28)年に「九段会館及び同敷地に関する件等委員会」(座長・伊藤滋)を立ち上げ、九段下交差点から見えるL字形の部分を残しつつ、その後ろに高層ビルを建てることが決まった。

財務省による2段階一般競争入札を経て、東急不動産・鹿島建設・梓設計の連合体が事業者になり、先掲の委員会の提言に沿って、九段会館の歴史的価値があるL 字形の部分を残しつつ、それに隣接して17 階建てのオフィスビルを設計・建設することになった。その保存改修、再開発で評価できるのは以下の点である。

1. 免震層の上に旧館を載せ、耐震性を高めたこと
2. 外壁の擬石と膨大な数のスクラッチ・タイルをすべてピンニングし、その跡が見えないほどの精度で仕上げたこと
3. 既存部の主要室や主階段を維持しつつ、当時の写真をもとに照明や金物を復元したこと
4. 北側玄関を新館のメイン・エントランスとし、玄関奥のロビーの北側壁に、取り置きしてあった当初のスクラッチ・タイルを張って、旧館から新館のシークエンスに配慮したこと
5. 予想される事故を未然に防ぐために、RC 杭を取り替え、天井支持材をより丈夫なものに変更したこと

そのほかに、広場を緑化し、皇居の堀沿いに通り抜け可能な遊歩道を設けたこと、屋上を緑化してその一部を一般に開放したこと(これは塔屋を残したことで可能になったもの)やなども評価できる。

9. まとめ

1934(昭和9)年に軍人会館として建てられてから九段会館(1957)へと、この建物は役割を代えて継承されてきたわけだが、このほど、その建物の当初の建築史的価値の主要部を保全しつつ、それを核に、地域により貢献できる施設として今後も活用されることになったのは高く評価できる。大規模再開発事業だったわけだが、軍人会館の歴史的価値を担保しつつ、細部にまで気を配って、ていねいに整えられていることが評価できる。

なお、今回の再開発事業に際して、2019(令和元年)年9 月10 日付けで、旧軍人会館保存部は登録有形文化財に登録されている。

2014　財務大臣宛　要望書

「九段会館」の歴史的重要性を未来へ継承することのお願い

2014年9月21日

財務大臣　麻生 太郎　様

公益社団法人　日本建築家協会（JIA）
関東甲信越支部　支部長　上野 勇
同 保存問題委員会　委員長　安藤文男
同 千代田地域会　代表　篠口純男

「九段会館」の歴史的重要性を未来へ継承することのお願い

拝啓　　様で益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
貴省におかれましては，日頃より文化の発展と継承に深く理解を示されていることに，かねより敬意を表します。

貴省所有の，東京都千代田区の九段会館に関する以下のお願いに先立ち，2011年3月11日の東日本大震災での天井崩落事故の犠牲者の方々に対し，弊会としましても心から哀悼の意を表します。

さて，震災を契機に閉館した九段会館の取り壊しについて，過日，新聞で具体的な報道がされました。それによると跡地にPFI方式により国が民間事業者に土地を貸し付け，事業者が高層ビルを建設し，国は建物の一部を特定施設として取得した上で日本遺族会に無償で貸し付け，弊会がこれまでどおり事務所として使う，という構想となっております。

九段会館は，1934（昭和9）年に軍の予備役・後備役の訓練・宿泊を目的に，宿泊部分で大講堂をもつ「軍人会館」として竣工しました。1936年の「3・26事件」の際には戒厳司令部が置かれ，1940年には大政翼賛会がここで結成式を挙げ，また戦後は一時，連合国軍総司令部（GHQ）に接収されるなど，日本の現代史の重要な局面の舞台となって来ました。GHQから土地と建物が国に返還された後に「九段会館」と名称を変更し，1955年から財団法人日本遺族会に無償で貸し出され，同会がホテル，ホール（大講堂），レストラン，事務所等を運営してきたのはご高承のとおりです。

軍人会館は競技設計が行われ，一等当選案は小野武雄，実施設計は川元良一，技術顧問は日本の近代建築の礎を築いた一人である伊東忠太，大講堂の音響設計はその分野の先駆的建築家，佐藤武夫となっています。小野武雄は，大蔵省営繕管財局で，1930（昭和5）年竣工の旧横浜地方裁判所を設計した技官です。また川元良一は，三菱合資会社で後に小太郎のトラルビル」の設計などに携わり，その後同社の設計部長として，1932（昭和7）年竣工の東京アパートメント（現：霞野ビル），青山同潤会アパートなど，建築史上重要な建物群を設計しています。

九段会館の外観は，競技設計の「審査ノ際特ニ考慮ヲ払ヒタル点ハ軍人会館ノ特色ヲ表現スル」という条件を具現化しようとしたものと言われ，国際的な近代主義に抗しようとした昭和初期の意匠の流れにあり，洋風の建物の上に和風の意匠を載せた，いわゆる「帝冠様式」の典型にも挙げられます。他方，ここでは垂直方向を強調しつつ，下部のスクラッチタイルに対応させる白い4階外壁により水平性も同時に強調した意匠とし，内外の随所のディテールにも意を尽くし，複合的な用途に対応した当時最新の音響計画，設備技術を採用するなど，密度の濃い設計がなされています。

北の丸公園を背に，濠を挟んで建設された九段会館は，千代田区景観まちづくり重要物件第一号に指定されており，戦争という過去を直視させる記念碑としての歴史性，昭和初期の建築物の実例としての希少性，さらに九段下の風景を長く形成してきた景観資産的価値から考えれば，千代田区のみならず我が国にとって，極めて重要な建築物であると考えます。

今後，計画の詳細を検討されるにあたっては，九段会館の歴史的・文化的・景観的な価値を積極的に活かすべく，その原形を可能な限り保存して活用を図り，この建物の持つ意義を正しく後世へと引き継いで頂けますよう，ここに切に，お願い致します。

なお，公益社団法人　日本建築家協会としましても，出来る限りの協力をさせて頂く所存であることを申し添えます。

敬具

公益社団法人 日本建築家協会
〒108-0014 東京都港区芝5-26-20 建築会館
TEL 03-3453-3231　FAX 03-3456-1851

1934 建築雑誌　佐藤武夫

建築雜誌

第48輯　第587號

昭和9年7月

目次

論説

東京内高しくは横浜内に於ける日独車定借家の問題　分部光　715

朝鮮慶尚北道安東縣及び英州郡に於ける新興時代建築に就て　藤島亥治郎　723

講演

屋根の塗裝内務　鉄筋鉄骨　743

オーディトリアム音響設計の實際　佐藤武夫　753

雑報

東京の氣象　岡田滋玄　768

昭和8年4月1日統計　778

昭和7年建築に關する法令　783

昭和8年秋の保護色ペンキ　787

昭和8年春の船舶に關する法令　788

文献抄録　793

時報　809

紹介　809

本會記事　810

會員動靜　812

會報　812

現代建築物　814

巻末附圖　815

室戸人會館　逓信省電務局研究所及技術部

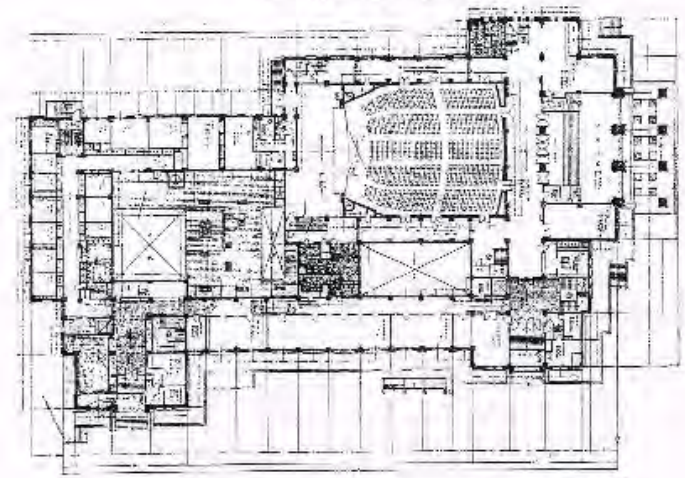
日本基督教團青山學院

大日本麦酒株式會社吉塚ビヤホール

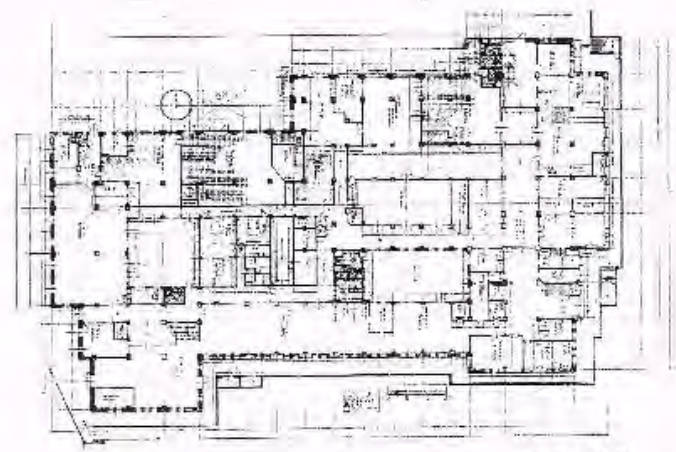
名古屋第一共同會舘

建築學會

室戸人會館（1）

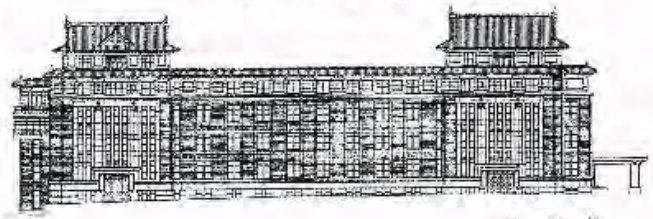


1階平面圖

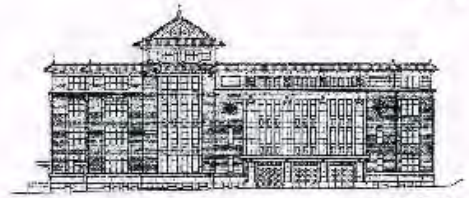


地階平面圖

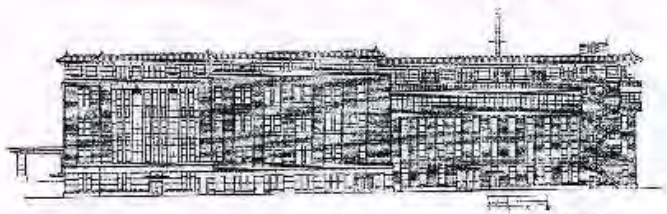
基 人 會 館 (3)



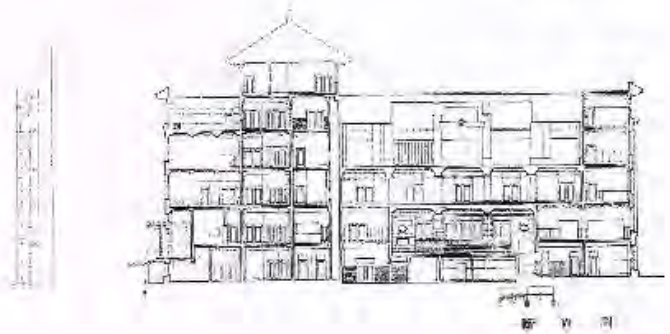
正 面 圖



北 側 面 圖



西 側 背 面 圖



斷 面 圖

基 人 會 館 (5)

外 觀(北 東)

階 段 室

20191031　プレスリリース

100年をつくる会社
鹿島

プレスリリース

[2019/09/17]

登録有形文化財の歴史的建造物「旧九段会館」建て替え事業（仮称）九段南一丁目プロジェクトが新築着工

「水辺に映えるレトロモダン」をコンセプトに2023年7月竣工予定

東急不動産株式会社
鹿島建設株式会社

東急不動産株式会社（本社：東京都渋谷区、社長：大隅 郁仁）と鹿島建設株式会社（本社：東京都港区、社長：押味 至一）が出資する合同会社ノーヴェグランデは、（仮称）九段南一丁目プロジェクト（以下、「本プロジェクト」）の新築工事に着手したことを、お知らせいたします。

本プロジェクトは、1934年（昭和9年）に完成した歴史的建造物である旧九段会館を、一部保存しながら建て替える事業です。オフィスを中心とした高度利用化一体的に図ることで、歴史的価値のある施設を活かしながら新たな価値を付加し、賑わいのある空間を創出します。

"皇居外苑のお濠に面する"という都内随一の立地を活かし、新築部分全てのフロアから お濠や皇居外苑の四季を感じられるよう、お濠側に最大的な庇間の視座を計画しています。また保存部分の屋上には、ラウンジや自然を感じられる庭園も設置します。

なお旧九段会館は、城郭風の重厚な外観を基く帝冠様式の威風堂々とした外観や、要所に用いられた装飾性豊かなアール・デコの特徴等、九段下の街並景観の象徴的存在であることが評価され、2019年2月に登録有形文化財に登録されました。

既存門扉から動作を感じるイメージ

メインエントランスイメージ

開発コンセプト

本プロジェクトの開発コンセプトは『水辺に映えるレトロモダン』。
歴史的価値のある保存部分の風格と お濠の自然を活かして、快適で豊かに働ける新しいオフィスが誕生します。

本計画の特徴

●様々なワークスタイルに対応する多様なオフィスを提供

新たに建て替えとなる地上17階建てのオフィス部分には、お客に関する基準階約750坪のオフィスフロアを設けます。保存部分は建設当の姿を保存・復原し、内部にも当時の意匠を引き込むことにより、登録有形文化財に指定されている保存建物の中で働くことができる希少性高い小規オフィスを提供します。また、1階には全員制のシェアオフィスを設置することで、様々な働き方に対応します。加えて竣工後より活用されていた「宴会」「集会」は、内装も新築時の姿に復原の上、一般利用が可能なカンファレンス施設等として、ワーカーのビジネスをサポートします。

●「健康増進」「ダイバーシティへの取り組み」をビル会社でサポート

働き方改革の下支えとなり企業の価値でもある健康経営をサポートするため、ランニングステーション・保育室・食育に寄与する菜園の設置や、各種地域サポートイベントの開催等により、入居テナントの「健康経営」に寄与するサービスをビルとして用意します。また、ダイバーシティへの取り組みの一環として、礼拝室・オールジェンダートイレも設置します。

●「安心・安全」のサポート

最先端のAIカメラ技術により、一歩進んだ安心・安全に寄与する次世代のセキュリティーシステムを実施予定。保存部分では免震補強・新築部分では制振構造を採用し、5日分の電力供給が可能な非常用発電機の設置、防災備蓄倉庫の設置等、非常時にも安心・安全のオフィスを提供します。

●「風のチカラで"日本のはたらく"を変える」「Green Work Style」を採用

東急不動産では、働く人々が抱える様々な問題に着目し、オフィスビルにおいて風の力を活用する取り組みとして「Green Work Style」を採用しています。風の力でオフィスワーカーの心身の健康維持・向上を図るだけでなく、業務効率の改善など生産性向上に寄与する取り組みを、本プロジェクトでも採用します。保存部分の屋上庭園の他、建物北側のメインエントランス前には広場空間を、お濠沿いにはテラスを設置し、オフィスワーカーや九段下エリアを訪れる人々に憩いを与える風水環境を創出します。

【Green Work Styleウェブサイト】 https://www.tokyu-land.co.jp/urban/hibiki/gws/

お濠沿いテラスイメージ

屋上庭園イメージ

事業概要

名称　：（仮称）九段南一丁目プロジェクト
事業主体　：合同会社ノーヴェグランデ
※東急不動産、鹿島建設が本プロジェクトのために出資する事業会社
所在地　：東京都千代田区九段南一丁目5番1外
交通　：東京メトロ半蔵門線・東西線、都営新宿線「九段下」駅徒歩1分

用途　：事務所、店舗、集会場、駐車場等
敷地面積　：約8,765m²
延床面積　：約67,738m²
構造・規模　：S造（CFT造）・RC造・SRC造　地下3階地上17階
高さ　：約74.9m
設計者　：鹿島・梓　設計・工事監理業務共同企業体
施工者　：鹿島建設株式会社
竣工　：2022年7月（予定）

位置図

位置図

プレスリリースに記載された内容（価格、仕様、サービス内容等）は、発表日現在のものです。
その後予告なしに変更されることがありますので、あらかじめご了承ください。

Copyright (C) 1995-2019 KAJIMA CORPORATION All Rights Reserved.

20220331および20220927　旧九段会館の保存建替プロジェクト見学会

主催;保存問題委員会

九段会館テラス（旧九段会館の保存・建替えプロジェクト）見学会
20220331 10：00～12：00
現場内4階会議室
建築主：ノーベグランデ（東急不動産と鹿島建設による合資会社）
説明者：鹿島建設　建築設計本部　土井原泉統括グループリーダー、山本幸彦チーフアーキテクト
参加者：（保存問題委員会）太田、下崎、福田、大西、安達（文）、小谷野、長井、黒田、安達（治）
（千代田地域会）大橋、（長野地域会）池森
（再生部会）柳沢、柿本、大隈
以上14名

20220927　13：30～15：00
参加者：（保存問題委員会）太田、福田、（千代田地域会）中山、桐原

説明内容
経緯
・1934　軍人会館として創建
・1945　GHQ]アーミーホール（進駐軍宿舎）として使用
・1953　九段会館に改修
・2011　東日本大震災でホール天井崩落、休館、廃業し国に返還。
・2014　JIAから財務大臣へ「九段会館の歴史的重要性を未来へ継承することのお願い」提出。
・2015　建築保全センターによる建物調査：本館は震度６強から７の大地震で倒壊または崩落する危険性がある。適切な耐震補強をすれば継続使用可能。
・2016　九段会館及び同敷地に関する検討委員会（伊藤滋、岡部明子、西村幸夫、桝田佳寛、野城智也、吉田鋼一）
　＜報告書＞昭和初期の時代性を表現する建築物としての希少性、九段下の景観のシンボルとしての重要性、および日本の現代史の舞台となった歴史性を認め、歴史や建築物の継承の社会的意義が高いと評した
　　利用にあたっての設備の付加や一定の改変を容認する「動的保存」を前提。
　　玄関ホールや宴会場のある本館北側部分は建物を保存、南東部の塔屋を含む本館東側部分は建物を「復元的整備」を求める。
・2017　PFI方式で再開発プロジェクトスタート。70年定期借地。保留床560m2を財務省から日本遺族会に貸付。
・2018　保存活用について、東工大藤岡教授の指導、コンサル高村氏のアドバイスを受ける。

保存活用について（20211029ニュースリリースから）
1．保存棟（旧九段会館）の工事の特徴
（1）文化的価値のある材料や逸品の保存活用
（2）創建当時の工法・技法を研究し、現代技術とミックスした内装・建具の復元
（3）安全と保存の両立を実現する免震レトロフィット工法の採用
2．保存棟（旧九段会館）の活用
（1）昭和初期のモダニズムを感じさせる宴会場
（2）ワーカーのビジネスをサポートする貸し会議室
（3）創建当時の雰囲気を感じられるシェアオフィスと小規模オフィス
（4）オフィスワーカー専用の屋上庭園とラウンジ

20220331見学会メモ
・保存部分は免振レトロフィット工法、新築部分は制震構造。エクスパンションジョイントの幅は650㎜。
・外壁スクラッチタイル：ピンニング工法で剥落防止。温水高圧洗浄。
・屋根瓦：瀬戸瓦。半数を再利用、転用。足りない部分は古い窯で試作、三州瓦で再現。織部色。
・外部建具：スチール製。
・竪樋：塩ビなどに改修されていたものを銅製に復元。
・玄関ホール：ラスモルタル下地漆喰塗からLGS下地パネルに漆喰塗に変更。創建時の漆喰模様復元。
・玄関ホールブロンズ扉：劣化のため新たにステンレス下地で組み直しブロンズ表面材で復元。
・宴会場鳳凰：壁や天井の漆喰による唐草模様を復元。専用の鏝を独自作成。
・宴会場真珠：改修されていた天井を絵葉書から雰囲気を再現。高窓復元。天井下地を鉄骨補強。
・応接室：壁面塗装を丁寧に除去し、正倉院宝物の銀壺の文様に類似したクロスを復元
・階段室：希少価値高い大理石を再利用
・2011天井崩落の調査結果？
・照明：創建時の写真などあるものは復元。
・金属製建具の再利用
・刀剣や陸軍勲章などをデザインに取り入れた金属製装飾：磨き上げて再利用

20220927見学会メモ
・復元は、財務省の意向もあり、創建時の軍人会館のデザインに戻すことをめざした。
・復元に際して図面は少なく、もっぱら遺族会所有の写真や新聞社の写真を参考とする。
・構造図が残っていたので補強の仕方について判断ができた。
・外壁の鬼神は左官造りで痛んでいたため、３DスキャンしてGRCで復元した。
・当初の天井は木下地＋ラス網モルタル＋漆喰（60k/m2）、これを吊らずに鉄骨下地に直付天井とする。
・ガラスは当初のシングルから改修後はLow-eペア、外壁も断熱性能をUPさせる。
・旧九段会館の一部が都市計画道路にかかっていたため、検討委員会から財務局経由で千代田区に変更要望し変更した。
・屋根瓦のデザインは直線的で、アールデコの影響が認められる。
・屋根瓦は40色ほど試し焼きし、4色を採用した。目につく部分に主に既存のものを配置し、新しいものはランダムに配置した。
・階段室の腰壁には、写真を基に復元したブロンズ製金物を取り付けた。
・階段室の腰壁には、既設の真鍮製手摺に、新たに同製の手摺を追加した。
・宴会場真珠の壁にある金物装飾は、真鍮製に錫メッキされたものに塗装がなされていた。塗装を除去して竣工時に戻した。
・宴会場真珠のバルコニー左右壁にある絵画は当初のもので、改修時には専門家を呼んで養生した。
・既存床には人造石研ぎ出しが多用され、既存のものは補修し、仕様が分からない床にも技術保存のために使用した。
・既存外部スチールサッシは、枠を傷めないようにカバー工法を採用し、桟については当初の割付に近くなるようにした。

20220331見学会